

的に命中！ポーク！

小野田 俊蔵

(おのだ しゅんぞう)

佛敎大学教授

人生は
りて
決ま
り文

弓矢にまつわる諺

「苦しまぎれの言い訳」を笑う、こんなチベット語の諺があります。

nda'la rgyag shed yod kyang/ gzhul la
dkar shed mi 'dug/「矢を射る力はあるん
だけど、弓を引く力がないんだ」。

「射る」という行為は、弓の弦を引つ張つて離す(放つ)一連の行為ですから、これは明らかに矛盾です。けれど、こんな風に言われると、正しい理屈であるかのように

絵：小野田 俊蔵



力を射る力はあるんだけれど、弓を引く力がないんだ

思えるところが不思議です。おもちゃの鉄砲を使った夜店の射的場で、お父さんにコルクのタマを詰めてもらい、装填してもらって撃っている幸せそうな親子の姿をわたしは想像しました。けれど、弓の場合は無理ですよ。洋式のアーチェリーならできると普通の弓では「さあ、射るだけで良いようにしたから射ってみなさい」と子どもに手渡す訳にはいきません。

必要以上に気張らないチベット人の気

質が読み取れるこんな諺もあります。

nda' za phang par bkang yang/ g'at
sa mde'vi nya rse gang/「弓を力一杯強く引つ張るのはいいけれど、せいせい矢の長さまでしか引けな」。

やり過ぎると元の木阿弥になる、という意味でしょう。モンゴルには「自分の布団の丈に合わせて足を伸ばせ (Könjil-e-yin-yen kir-ber kol-yen jig)」という諺も

あります。自分に見合った規模で活動をするべきだ、という意味です。着実に目が行き届く範囲で問題を処理しているのだと自分では思っている、実際に思いは適度を越えていて、気が付くと大失敗ということがあります。引つ張り過ぎてつがえた矢が弓からはずれたら、もう一度最初から矢をつがえなければ致し方ありません。チェーン店を拡げ過ぎて倒産した会社を思わず連想してしまいます。身体感覚として掴める範囲、というのが本

弓を力一杯強く引つ張るのはいいけれど、せいせい矢の長さまでしか引けない



来は我々人類にもっとも合った生き方なのでしよう。バーチャルな世界だけが拡がっていつて、身体感覚では全く掴めていない仮想の世界に操られる、などという事のないようにしたいものです。

美しい放物線のその先

ところで、チベットやモンゴルの弓は左のほうから矢をつがえて引つ張り、発射する瞬間に弓全体を時計回りに右に少し倒しながら矢を射ます。矢を弓の上に載せるようにして発射するのです。所謂アーチェリー型です。右のほうから矢をつがえる日本の長弓の射方とは全く違うのです。矢は少し上空に向けて発射され、標的までゆるやかな放物線を描いて飛んで行きますが、これが不思議に見事に的に命中するのです。

ブータンなどでは標的の近くに見物人がいて、的にあたると皆んなが大声で「hog (ポーク)！」と叫んで踊り始めます。そう言えば、那須の与一が扇を射止めたときに敵味方なくほめ讃えた、そんな風景を彷彿とさせます。但し、日本の通し矢のように矢を力任せに勢い良くまっすぐ飛ばしてそれが的にあたって、それは当たり前過ぎて、彼らには美しくとも何とも見えないのかも知れません。美しい放物線のその先の予想も付かない中がまさしく命中なのでしよう、わかります。